

曰僕固、三曰渾、四曰拔曳固即拔野古、五曰同羅、六曰思結、七曰契苾、以上七姓部、自國初以來、著在史傳、八曰
阿不思、九曰骨崙屋骨、恐此二姓、天寶後始與七姓齊列

と曰へるは、此の情勢に關して、能く其の實を傳へたるものと解せざる可らず、思ふに唐と關係深かりし回鶻は舊來九姓より成りしが爲に、舊唐書の編者は、鐵勒九姓を誤りて此等の九姓と見、新唐書の編者は、更に此の誤を基としたるものに外ならざるべし。

鐵勒九姓中に數へらるべき諸部の名稱は、前記の如く唐會要に掲げらるれど、之に就きては尙研究を要すべきものあること、次篇に於て論じたるが如し、されば此の際裴羅が可汗として統ぶるに至りたる諸部及び地方に就きても、亦之を他日の研究に譲らざる可らず、唯唐會要に載する九姓の名目中、既に疑の存する無しと信すべき諸部、即ち回鶻〔六二〕を始め、拔野古・思結・同羅・僕固・渾等數部の住地を考へ、以て當時九姓回鶻可汗の勢力の及びたる大部分の地域を求むるに、回鶻部が始め Selenga 河域に據り、後更に Tola 河域に下りしことは前に見たるが如くなるが、同羅も略ぼ回鶻の舊位置に住みしものと見え、唐書同羅傳に、「同羅在薛延陀北、多覽葛之東、距京師七千里」と見え、薛延陀を基としたる方角も、京師との間に於る里數も全く回鶻と同一なり〔六三〕。僕固即ち僕固は、通典に「最居北偏」と記し、唐書僕固傳にも「地最北」と記さるゝが、然も通典に「與同羅宿敦隣好」と見え、唐書に同羅と同じく多覽葛の東に在りと思ゆれば、亦同羅に近く、其の北隣を爲したるものと見ざる可らず。思結は唐書思結の傳に「在延陀故牙」と見ゆれば、即ち鬱督軍山〔六四〕、元代の和林山附近、Orkhon 河域に據り、渾は唐書の其の傳に「渾在諸部最南」と記さるれば、思結よりも更に南方に當り、Orkhon の上流域、若しくは Ongin 河谷地